



モンテーニュ★★

エッセー II

河野與一校閲 原 二郎訳

世界文學大系

世界文学大系 9_B

モンテ・ニュ ★★

昭和 37 年 7 月 30 日発行

訳 者 原 二 郎

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291)局 7651

目次

二七

原二郎訳

第二卷（第十三章—第三十七章）

5

第三卷（第一章—第十三章）

137

解説

落合太郎

395

年譜

432

裝
幀
庫
田
發

モンテ・ニュー
★
★

第二卷

第十三章 他人の死を判断することについて

て

④死は確かに人間の生涯においてもっとも注目すべき事柄であるが、われわれは他人の死ぬときの落ちつきを判断するに当たって、ある一つのことを銘記せねばならぬ。それは、「人はなかなか自分がいよいよ最後に来たとは思わないものだ」ということである。これが自分の最後のときだと覚悟して死ぬ人はほとんどない。また、そのときほどはかない望みがわれわれを欺くこともない。その望みがわれわれの耳に絶えず、こうささやく。「他の人たちはもっとずっと病気が重かったが死ななかった。おまえは人が思うほどに見込みがなくなはない。それに、もっと悪い場合にも、神様はいろんな奇蹟をお示しになった。」だが、われわれはあまりに自分を重大なものとして自惚れるからこんなふうを考えるのだ。われわれは、われわれが滅亡すれば、全世界がいくらか損害をこうむり、われわれの状態をとみに悲しむように思うのだ。われわ

れの目が混乱しているために、事物までが同じように混乱して見えるのだ。そして事物が見えなくなると、事物が目の中から去ったように思ひ込む。ちやうど海を行く者が、山も、野も、町も、空も、陸地も、自分たちと一緒に揺れ動いていると感ずるように。

⑤われわれが港から遠ざかると、陸地も町もうしろに退く。

自分の悲惨と悲痛を、世間と道義のすたれたせいで、昔を讀え、現在をけなさないような老人が一人でもいるだろうか。

いまや年老いた農夫は、頭をふりながらためいきをつき、過ぎし日を今と比べ、しばしば父の幸運をたたえ、昔の人々がいかに信心深かったかをくりかえす。

われわれはすべてを自分とともに引きずってゆく。

④その結果、われわれは自分の死を重大なごとと考えるようになる。それはそんなに軽々しく、星辰のおごそかな協議なしに、起こるものではないと考えるようになる。⑤「一人の人間のまわりにかくも大勢の神々が大騒ぎをする。」④そして自負すればするほどますますそう考える。⑥「何だ。これほどの知識が無駄になつてこんなに損害をひき起こしているのに、運命の神々はそのことに特別の心づかいを示さないのか。神々にとっては、これほどまれな、世の鑑ともいふべき魂を死なせることが、普通の、役にも立たない魂を死なせるほどにもつらくないのか。あれほど多くの他の生命を庇護し、あ

凡例

本書に使用したテクニクスは Pierre Villey: Les Essais de Michel de Montaigne, 3 vol., 1922 (Felix Alcan) による。

モンテニユの「エセー」は、一五八〇年に、九十四篇が二巻に分けて刊行された。それから八年を経て、一五八八年に、さらに十三篇が第三巻として刊行された。それと同時に、第一巻と第二巻にほとんど改作に近い大増訂がほどこされた。これが一五八八年版である。その後、モンテニユは、一五八八年版の一本を常に座右に置き、その余白に自筆で丹念な細字で次々と書き加えをして、死ぬ間際までその仕事をやめなかった。これが今日のポルドー市版という決定版の原本となった。訳文中、④は一五八〇年版のテクニクスを、⑤は一五八八年版における増訂の部分を、⑥はその後のモンテニユが自筆で加筆した部分を示す。

訳文中、前後に一行を明け、二行下げた箇所はラテン語の韻文の引用である。ラテン語の散文の引用は、行をあげずに、へへ印を付した。いずれも、テクニクスの体裁になったものである。中に数カ所、ギリシア語、フランス語、イタリヤ語の引用のある場合は、その旨を注でことわった。また引用の出典はテクニクスにはないが、注において示した。本文の中で、モンテニユが典拠とした著書および著書の箇所をも注においてできる限り示した。

第十三章

- (1) ウェルギリウス「アエネイス」三の七。
- (2) ルクレティウス「事物の本性」二の二六五。以下「事物の本性」を略す。
- (3) 大セネカ「弁論軌範」一の一四。

れはど多くの他の生命が頼りとし、あれほど多くの人々を使い、あれほど多くの地位を満たしている生命が、自分ひとりだけに一重結びでつながっている生命と同じように、この世を去っていいのか」と考える。

われわれは誰一人として、自分がただ一人の人間にすぎないことを十分に知っていない。

④そこから、カエサルが、彼をおびやかす海よりももっと増長して、船頭に言ったあの言葉が生まれたのである。

おまえは神の御加護でイタリヤまで行くのをためらうなら、私を信じて漕いでゆけ。おまえは、おまえののせている私が誰であるかを知らないから、こわがるのも無理はない。……

さあ、嵐をついてゆけ。私がおまえの守り神だ。安心してゆけ。

また次の言葉もそうである。

今カエサルは、この危険を自分の運命にふさわしいものと信じてこう言った。この私をくつがえすことは、神々にとつてこんなにも苦労だと見え、小さな艦に坐っている私にこんなにも大きな海で襲いかかる。

⑤また、「太陽はまる一年の間、その額に彼の死をいたむ喪の印をつけた」という人々の空想もそれである。

カエサルが死ぬと、太陽もまた、ローマをあわれんで、自分の輝く額をくすんだ錆色でおおった。

またこれに似た空想はたくさんある。世間はそれらにあまりにやすやすとごまかされて、われわれの損失が天を変化させると思っている。⑥無限の天がわれわれの区々たる差別に心を動かすと思っている。《天とわれわれとの間柄は、われわれが死ぬとき、星辰の光も死ぬほどこに親密なものではない。》

④さて、危険の中にあつても、自分でまだ本当にそれ信じない人を見て、決断と剛毅をもっていると判断するのは正しくない。そのような態度で死んだというだけでは十分ではない。本当にその覚悟ができて死んだのであれば十分ではない。たいていの人は、そういう評判を得るために勇ましい顔色や言葉をとりつこう。まだ生きているうちにその評判を享受しようと思む。⑥私はいろんな人の死ぬところを見たが、その立派な態度はいずれも運命がとらせたもので、彼らの意志がとらせたものではなかった。④また昔の、自ら死を選んだ人々についても、それが急激な死であつたか、暇のかかる死であつたかを区別して考えてみなければならぬ。あの残忍なローマ皇帝は、その捕虜たちについて、彼らに死を感じさせてやりたいと言っていた。そして誰か獄中で自決した者があると「あいつは私の手をのがれた」と言った。つまり、責め苦で死を延ばし、それをとくと味わせたかつたのである。

⑤われわれは、瀕死の人が、全身傷だらけになりながら、まだ致命傷を与えられずに、苛酷なしきたりによつて、死を延ばされているのを見た。

④本当に、まったく健康で落ちついているときに自殺を

(4) その生死がその一個人だけにしか影響のない人の意。

(5) ルカヌス「ファルサリア」五の五七八。

(6) 同右、五の六五四。

(7) ウェルギリウス「農耕詩」一の四六五。

(8) プリニウス「博物誌」二の八。

(9) カリグラを指す。在位三七七一。

(10) スエトニウス「カリグラ伝」三〇。

(11) これはカリグラではなく、ティベリウスの言つた言葉である。スエトニウス「ティベリウス伝」六一。

(12) ルカヌス「ファルサリア」二の一七八。

(13) ローマ皇帝、在位二一八—二二二。シリアに生まれ、日の神エルガバ

ルスの祭司であつたが、軍隊に推されて、十四歳で即位した。ローマでは、

その母とともに日の神の狂信におちいり、素行もおさまらず、軍隊の暴動によつて殺された。

(14) ルカヌス「ファルサリア」四の七九八。

(15) ルキウス・ドミティウス・アヘノバルプス。前五四年のローマの執政

決心するのはそれほど偉いことではない。まだ死と取っ組み合いをしない前に空威張りをして見せるのは実にやさしいことだ。だから、世にも女々しいヘリオガバルスでさえも、情弱な快楽の最中に、いよいよ死なねばならぬ機会が来たときに楽に自殺できる方法を考えていた。そして、彼の死がそれまでの一生にふさわしいようにと身を投げるために、わざわざ豪華な塔を建てさせ、その前と後に金や宝石で飾った板金を張り付けた。また首をくくるためには、金と緋の絹糸をより合わせた綱を作らせ、身を突き刺すためには、金の剣を打たせ、毒をあおぐためには、翠玉や黄金の器に毒を貯めておいて、そのときの氣持次第でこれらのあらゆる死に方の中からどれでも好きなものを選ぶようにしておいた。

㊦ やむをえず勇猛果敢になつて、

㊦だが、この人は、こんなぜいたくな用意をしたために、いざその場に臨めば、かえつて、怖気づいたにちがいないと思う。けれども、この人よりももっと逞しい人々が自殺を決心した場合についても、それがその結果を感じずる暇もないほどひと思いの打撃によるものかどうかを見なければならぬ。というのは、彼らが、生命が少しづつ流れてゆくを見ながら、肉体の感覚と精神の感覚を代る代る感じながら、思いとどまる道も手もとに残されている場合に、それでもなお決心を変えずに頑として、このような危険な意志を貫いたかどうかは、疑問だからである。

カエサルの内乱のときに、ルキウス・ドミティウスはアブルツツで捕えられ、毒を飲んだが、後で早まったことをしたと悔んだ。われわれの時代には、ある人が死

ぬ決心をして、一太刀突き立てたが、肉のちくちくする痛みに腕が鈍つたので、さらに二度、三度と強く傷つけたが、ついにずぶりと突き通すだけの勇氣が出なかつた。㊦プラウティウス・シルヴァヌスが裁判にかかつている間に、祖母のウルグラニアが彼に短刀を送つてよこしたが、彼はそれで自決することに失敗して、部下に命じて自分の血管を切らせた。㊦ティベリウス帝の時代に、アルプキラは自害しようとしたが、あまり弱く切りつけたためにかえつて敵に捕えられて、彼らの方法で殺された。大將のデモステネスもシケリアの潰走の後と同じ目にあつた。㊦また、ガイウス・フィムブリアは自分であまりに弱く突いたので、家来に止めを刺してもらつた。反対に、オストリウスは自分の腕を使うことができなかったが、家来の手を借りることをいさぎよしとせず、ただ、短刀をまっすぐにしかり持つていただけ命じて、自分から走つていって喉をそれに突き刺して死んだ。㊦本當に、これは十分に鍛えた喉をもたない人にとっては、嚙まずに呑み込まねばならぬ食物である。だから皇帝ハドリアヌスは、侍医に命じて、乳首の致命的な箇所を円い印で囲ませ、自分を殺して命じた者が狙うときの目印にしておいた。だからカエサルも、どういう死がもっとも望ましいかと聞かれて、「もっとも思いがけない死、もっとも短い死」と答えた。

㊦カエサルがあえてそう言つたのだから、私がそのように思つても卑怯ではない。

㊦プリニウスは、短い死は人生の最大の幸福である、と言つた。人々は死を見つめることがつらいのだ。だが、死と取引きすることを恐れ、目を開いてこれを見ることに堪えられない者は、死の覚悟ができていゝとは言えない。われわれは、死刑の宣告を受けた者が、その最後に

官。貴族党の有力者としてポンペイウスとカエサルに反対していたが、両者が不和になつてから、ポンペイウスに加担した。

(16) イタリア中部の山岳地帯にある町。

(17) プルタルコス英雄伝「カエサル篇三四。

(18) プラウティウス・シルヴァヌス・アエリウス。一世紀のローマの執政官。初めプリニウス征服の副官をつとめ、のち、アジアの指揮官として辺境を守つた。

(19) タキトゥス「年代記」四の二二。

(20) 一世紀のローマの貴族のサトリウス・セクンドゥスの妻。多くの恋人をもつていたことで有名。ティベリウス帝に対する不忠のことで処刑された。

(21) タキトゥス「年代記」六の四八。

(22) 前五世紀のアテナイの將軍。雄弁家のデモステネスとは別。

(23) プルタルコス英雄伝「ニキアス篇二七。

(24) 前一世紀のローマの軍人。マリウスを熱烈に支持した。マリウスの死後、アジアでミトリダテスと戦つて勝つた。スルガがアジアに到着するや、これと戦つて敗れ、自殺した。

(25) アッピアノス「ミトリダテス戦争」六〇。

(26) プブリウス・オストリウス・スカブラ。四七年のローマの補欠の執政官。ブリタニア征服を指揮した。五六年憔悴の果てに死んだ。

(27) タキトゥス「年代記」一六の一五。

(28) タシフィリヌス「ハドリアヌス伝」の終章。

(29) スエトニウス「カエサル伝」八七、およびプルタルコス倫理論集「古代諸王および諸帝書句集」。

(30) プリニウス「博物誌」七の五三。

向かつて走り、処刑を急がせ、せき立てるのを見るが、これは彼らが覚悟がよくてするのではない。死を考える暇をのぞきたいからするのである。死んでしまうことがつらいのではなくて、死ぬことがつらいのだ。

死んでいることは何でもないが、死ぬことがいやなのだ。

この程度の決断ならば、私にもできそうな経験がある。これは目をつぶって、海に飛び込むように危険に飛び込むのと同じだ。

⑩私の考えでは、ソクラテスの一生のうちで、彼が三十日の間、その死の判決を反芻したこと以上に輝かしいことは何もないと思う。また、彼がその期間を通じて、動揺も変化も見せずに、しっかりと希望をもち続け、このような重大な思案のために力んだり興奮したりせずに、平静な、むしろ無関心と言ってもよいほどの言動を保ち、静かに死をかみしめていたこと以上に、輝かしいことは何もないと思う。

⑪キケロがその書簡を宛てたあのポンポニウス・アッティクスは、病氣にかかったので、婿のアグリッパと二、三の友人を呼んで、「自分はこれまで病氣をなおそうと思っても何の益もないことを経験したし、生命を延ばそうとしてすることはすべて苦痛を延ばし、増大するだけであることを経験してきたから、今度は生命と苦痛の両方を終えようと決心した」と言って、彼らにこの決心に賛成してくれるように頼み、もしそれができなければ、せめて、自分にこの決心をひるがえさせようと無駄骨を折らないでほしいと頼んだ。さて、そこで自殺するため断食を選んだところ、偶然に病氣がなおってしまった。

死のうとしてとったこの方法が彼を健康にしたのである。医者や友人たちはこの幸運な出来事を祝い、彼とともに喜び合ったが、それがとんだ思い違いであることがわかった。というのは、そうなるのも彼の意見を変えさせることができなかったからである。彼は、この通路はいずれいつかは越えねばならぬのだし、せつかくここまで来ているのだから、わざわざもう一度出直すことはしたくない、と言っただけでなかった。この人は死を心ゆくまで知った後でこれとあうことにおじけなかったばかりでなく、ますます熱心にそれを望んだのである。実際、彼は戦いを始めたときの理由を満足させ、さらに進んで、その最後まで見届けようとしたのである。死を少しも恐れないことと、死にふれてこれを味わおうとすることとの間には雲泥の差がある。

⑫哲学者のクレアンテスの話はこれとよく似ている。彼の歯茎が腫れて腐ったので、医者たちは彼にきびしい断食をすすめた。二日間断食すると非常によくなって、医者たちもなおったからいつもの生活に帰ってよいと言った。ところが、彼はその衰弱の中にすでにある快感を味わったので、いまさら後に下がるまいと心にきめて、すでに十分に進んできていた道をそのまま突破した。

⑬トクリウス・マルケリヌスというローマの青年は、我慢しようと思う以上につらい病氣をのがれるために、寿命の先廻りをしようと思ひ、医者たちが、そんなに急にはないがかならずなると約束したけれども、友人たちを呼んでそのことを相談した。セネカの言うところによると、ある人たちは、臆病のために彼ら自身がしそうなことを彼にすすめた。他の人たちはへつらって、彼にもっとも気に入るようなことをすすめた。しかし、あるストア学者はこう言った。「マルケリヌスよ、何か重

(31) キケロ「トクスタルム論議」一
の八。

(32) テイトウス・ポンポニウス・アッティクス、前二〇九―前三〇。ローマの富豪で、キケロの親友。アテナイに住みギリシアの学芸を愛好したことから、アッティクスの名前を得た。キケロが彼に宛てた書簡は十六巻に上っている。

(33) コルネリウス・ネポス「アッティクス伝」二〇。

(34) デイオケネス・ラエルティオス「クレアンテス篇」七の一七六。

大な事柄でも考えるように悩むことはない。生きるということは大したことではない。きみの召使たちや家畜も生きているではないか。むしろ、立派に、賢明に、毅然として死ぬことが大事なのだ。きみがいつから同じことを繰り返しているかを考えてみたまえ。食って、飲んで、寝る。飲んで、寝て、食うだけではないか。われわれはしじゅうこの輪の中を廻っているのだ。不幸な、堪えがたい出来事ばかりでなく、生の飽満も、死にたいという気持ちを起こさせるのだ。」だがマルケリヌスには忠告する人はいらなかった。手伝う人が必要だったのだ。召使たちはかかり合いになることを恐れたが、この哲学者は、「召使たちに嫌疑がかかるのは、主人の死が自殺かどうか疑わしい場合だけだ。それ以外は、主人が死ぬのを妨げるのは、彼を殺すのと同じくらい悪いことだ。なぜなら、

本人の意に反してその命を助けるのは、殺すのと同じことだ。

ということもあるからだ」と言い聞かせた。それから、その哲学者は、マルケリヌスに向かって、「われわれが食事の後で食卓から下げたものを手伝った人々に与えるように、一生を終えた後には、それまで仕えてくれた召使たちに何かを分けてやるのは不似合いなことではないだろう」と忠告した。ところで、マルケリヌスは鷹揚で、物惜しみをしない人であつたから、いくらかの金を分け与えて、彼らをねぎらつた。その上、彼は死ぬのにも剣も血もいらなかった。彼はこの生から逃げようと思わずに立ち去ろうと企てた。死から逃れようとせず、死を試めそうとした。そこでゆっくりと死を考察するために、あ

らゆる食物を断ち、三日後に微温湯をそそがせながら少しずつ弱つていった。彼の言うところによると、そこにはいくらかの快感がないでもなかった。事実、こういうふうに、衰弱によって心臓が弱つてゆくのを経験した人は、「何らの苦痛も感じない、むしろある快感を感じる。睡眠や休息に移つてゆくときみたいだ」と言う。

以上は観察され、味わわれた死である。

けれども、ただカトーの場合だけは、あらゆる点で徳の模範となるようにと、彼の恵まれた運命が、彼がわれとわが身に剣をつき刺したその手に傷を負わせて、彼を危険の中で意気沮喪させるところか、勇氣百倍させて、死とゆっくり顔をつき合わせ、その首根をとらえてねじ伏せる暇を与えたものらしい。もしも私が彼のもつとも堂々たる様子を描くとしたら、当時の彫刻家たちが描いたように、剣を手にした姿ではなくて、血に染まって自分の臓腑を引きちぎっている姿を描いたであろう。実際、この後の死に方が前のよりもずっとものすごいからである。

第十四章

いかにわれわれの精神は自らの邪魔をするか

④人間の精神が、二つの同等の欲望のちょうど中間に宙ぶらりになっていると考えるのは、おかしい想像である。というのは、それだと精神はけつしていずれにも決定しないにちがいない。どちらかをひいきするとか、選択するとかいうことは、価値の不同を意味するからである。だから、もしもわれわれが酒壺とハムの間におかれて、飲む欲望と食う欲望とをまったく同じにもつたとすれば、

(35) ホラティウス「詩論」四六七。

(36) セネカ「書簡」七七。

(37) プルタルコス英雄伝「小カトー」七〇、およびセネカ「撰理について」二。

きつと渴きと飢えのために死ぬよりほかに手がなくなるであろう。この不都合に備えるために、ストア派の人々は、「どちらでもよい二つのものについて、われわれの心を選択が起ころのはなぜか。また、たくさんある銀貨の中から他をとらずに、ある一つをとるのはなぜか。それらはみんな同じで、とくにその一つをとらせる何の理由もないのに」とたずねられたとき、「この心の動きは異常で不規律なもので、外的な、偶然の、気まぐれな衝動から来るのだ」と答えている。私にはむしろ言えるように思われる。すなわち、「どんなものでもわれわれの前に示されれば、いかにわずかも何かの差異をもたないことはない。またそこには、どんなに知覚できない程度であっても、つねに他のものよりも、われわれの視覚が触覚を引きつける何かがある」と。同様に、もしもここどの部分も同じように強い紐があるとすれば、それは絶対に切れることがないだろう。というのは、それはいったい、どの点で切れることができるだろうか。それとも、あらゆる点がいっぺんに切れるのだろうか。これは自然にはありえないことだ。もしも以上の事柄にさらに、確実な証明によって、「含まれるものは含むものよりも大きい」、「中心は円周と大きさが等しい」と結論したり、「絶えず接近しながらけつて交わるのではない二直線」を見いだしたりする幾何学上の命題とか、化金石とか、円積法とかの、理論と實際が矛盾する事柄をつけ加えるならば、われわれは、おそらくそこから、あのプリニウスの《不確実以外に確実なものは何もない。人間以上に惨めで、思ひ上がったものは何もない》という大胆な言葉を支持する何かの論拠を引き出せるであろう。

第十五章

われわれの欲望は困難にあうと増大すること

④「どんな理由も反対の理由のないものはない」ともつとも賢明な哲学の一派が言っている。私はいまちょうど、ある昔の人が生命を蔑視する理由として述べた次の名句すなわち「いかなる幸福も、われわれがそれを失ったときの覚悟ができていなければ、われわれに楽しみをもたらすことはできない。」⑤《あるものを失った悲しみと、失うのではないかという心配とはわれわれにとって同じように苦痛である。》⑥ということを噛みしめていたところだ。これは、もしもわれわれが生を失うことを恐れるならば、真に生を楽しむことはできない、と言おうとしたものである。けれども逆に、こうも言えるかも知れない。「われわれはこの幸福が確実でないと知れば知るほど、また、われわれから奪われはしないかと心配すればするほど、それだけしっかりと、愛情をこめてそれを抱きしめる」と。実際、火は寒い空気にあうとおこるように、われわれの意志も、反対にあうとかき立てられるということは明らかに感じられる。

⑦もしダナエが青銅の塔に閉じこめられなかったら、ユピテルの子をみごもらなかつたらうに。

⑧また、容易さから来る飽満ほどわれわれの意欲を自然にそぐものはないし、稀有と困難ほどそれを刺激するものはないということも、明らかに感じられる。《あらゆる事柄の快楽は避けるべき危険のあることによってます

第十四章

(1) プルタルコス倫理論集「ストア派の矛盾」。

(2) 円と等積の正方形を作る作図問題で、解決不能とされている。

(3) プリニウス「博物誌」二の七。

第十五章

(1) ビュロン派。

(2) セネカ「書簡」四。

(3) 同右、八八。

(4) ダナエはアルゴス王の娘。王は娘の子に殺されるだろうという神託があったので、彼女を青銅の塔に閉じこめたが、ユピテルが黄金の雨に身を交じて彼女と交わった。

(5) オウィディウス「恋愛詩」二の一の二七。

ます増大する。』

ガラよ、拒め。喜びにもときには苦しみがまじらないと、愛は飽きて来る。

愛情を永續させるために、リユクルゴスは、ラケダイモンの夫婦は人目をさけてでなければ交わってはならぬ、一緒に寝ているところを見られるのは他人と寝ているのを見られるのと同じく恥辱である、という命令を出した。逢引きの困難、人から見られることの危険、翌日の恥かしさ、

憔悴と、沈黙と、胸の奥底から漏れる吐息と、

これこそ、ソースにびりつとした味を与えるものだ。

①いかに多くのきわめて好色な面白い遊びが、恋愛の作品の貞潔な、つましい語り方から生まれ出たことか。

④肉欲でさえ、苦痛によってかき立てられることを求める。それは、ひりひり痛んで皮をすりむくとき、いっそう甘くなる。娼婦のフロラは、ポンペイウスと一緒に寝たときに、彼の体に齒で噛んだ跡をつけないことは一度もなかったと言っている。

彼は恋い求めるものを激しく抱きしめ、体に痛みを与え、たびたびその唇に齒をおしあてて。彼の喜びには針がひそんでいる。それが彼を、相手が何であろうと傷つけるようにかりたて、そこから狂気の種が生まれ出る。

すべてがこのとおりで、困難は事物に価値を与える。

⑤ アンコナの人々はサン・ジャック・ド・コンボステル寺院にお祈りをしたり、ガリシアの人々はノトル・ダム・ド・ロレット寺院にお祈りをしたがる。リエージュではルツカの温泉を、トスカナではスバの温泉をありがたがる。ローマの剣術の学校には、ローマ人はほとんど見られず、フランス人でいっぱいである。あの偉大なカトーも、われわれと同じように、彼の妻が自分のものであった間はこれに厭気がさし、他人のものとなるとこれを恋しがった。

⑥ 私のところのある年老いた馬が、牝馬の匂いをおくとうにも手に負えなくなるので、私はこれを種馬飼育場へやってしまった。いつでもできると言う容易さのため、この馬はたちまちその牝馬ともに食傷した。けれども、よその牝馬が放牧場のそばを通るのを見かけると、たちまちふたたびうるさくいなき出して、前と同じようにいきり立った。

④われわれの欲望は、手中にあるものを軽蔑し、それを飛び越えて、もつていないものを追い求める。

彼は手中にあるものをさげすみ、逃げるものを追いかける。

われわれに何かを禁ずることは、それに対する欲望を起こさせる。

⑤もしもおまえがおまえの娘を見張らなくなったら、彼女はすぐに私に捨てられるだろう。

④それをすっかりわれわれの自由に任せることは、われわれにそれに対する軽蔑を起こさせる。欠乏と豊富は同

(6) セネカ「恩恵について」七の八。

(7) マルティアリス、四の三七。

(8) プルタルコス英雄伝「リユクルゴス篇」一五。

(9) ホラティウス「エポドス」一一の九。

(10) プルタルコス英雄伝「ポンペイウス篇」二。

(11) ルクレティウス、四の一〇七九。

(12) アンコナは、イタリア中部、アドリア海に面する港。すぐそばにロレットの町があり、そこにはノトル・ダム寺院があり、巡礼の地として有名。

(13) 昔のスペイン西部の州の名。首都はサン・ジャック・ド・コンボステルで、そこに有名な寺院がある。

(14) ベルギーの東部、ムーズ河に沿った都市。

(15) イタリア半島北西部の都市。

(16) リエージュの南東の町、鉱泉で有名。

(17) プルタルコス英雄伝「小カトー篇」二五。

(18) ホラティウス「諷刺詩」一の二の〇八。

(19) オウィディウス「恋愛詩」二の一九の四七。

じ不幸におちいる。

おまえは多すぎて困っているが、私はそれが少なすぎて困っている。

欲望と享樂は同じようにわれわれを苦しめる。愛人たちの謹厳なのは、うんざりするが、あまり容易にいうことをきくのは本当のところ、もっとうんざりする。なぜなら、不満や怒りは、われわれが欲するものを尊重することから生じて、愛を刺激し、燃え立たせる。が、飽満はただ嫌惡を生むだけだからである。飽満は鈍い、だらけた、疲れた、眠った感情である。

③ もしも長く恋人をおさえておきたいなら、彼にすぎなくせよ。

恋人たちよ、相手をさげすむふりをせよ。そうすれば昨日こぼんだ女も今日はなびいてくる。

④ なぜポツペアはその美しい顔をおおうことを思いついたのか。それは恋人たちにその美しさの価値を高めるためでなくて何か。④ なぜ、女なら誰でも見せたいと思ひ、男なら誰でも見たいと思う美点を踵の下までおおうのか。なぜ、彼女らはわれわれの欲望と彼女らのそれとがもつぱらそこに集中する部分をあんなにたくさん障害物で、これでもかこれでもかとおおうのか。また、わが国の婦人たちが近頃その脇腹を守るのに用いたあの巨大な襦袢は何のためか。われわれを遠ざけることによって、かえってわれわれの欲望をそそのかし、われわれをおびきよせるためでなくて何であらう。

彼女は柵の陰に逃げてゆく。だが彼女はあらかじめ、見つかることを望んでいる。

⑤ 彼女はときどき上衣に身を包んで、はやりにはやる私をおしとどめる。

④ あの乙女らしい羞恥の科は何のためか。落ちつきはらった冷たさや、きびしい顔つきや、教えるほうのわれわれよりもよく知っている事柄を知らないふりをするのは何のためか。われわれに、これらのすべてのとりすました儀礼や障害を征服し、抑えつけ、われわれの欲望の足下に踏みじってやろうという気持を増大させるためでなくて何であるか。なぜなら、このやさしいおとなしさと、初々しいしとやかさとを熱狂させ、放埒にさせ、また、あの誇らしげな、いかめしい謹厳さをわれわれの情熱の思いのままにすることは、われわれにとって、楽しい貞潔ばかりでなく、名誉でさえあるからだ。「厳格、羞恥、節制を征服することは名誉である」と人々は言っている。ご婦人方にこれらの性質を捨てるようにそそのかす者は、彼女らをも、自分自身をもあざむくものである。われわれは、彼女らの心が恐怖にふるえ、われわれの言葉が彼女らの純潔な耳を汚し、彼女らがわれわれのしつこさに負けてやむをえず同意するのだと信ずることが必要なのだ。美人はいかに万能であっても、こういう邪魔が入らないと、十分に味わってはもらえないのだ。イタリアに行つてごらんさい。たくさん美人たちが、中にはもつとも美しい者までが、売物になっている。しかも彼女らは、可愛がられるために、美貌以外のいろんな手段を用いねばならないのだ。それでも、本当のどこ

(20) テレンティウス「フォルミオ」一の三の一〇。

(21) オウィディウス「恋愛詩」二の一三の三。

(22) プロペアルティウス、二の一六の一九。

(23) ローマの王妃、オトーと離婚してネロの妻となったが、のち、夫に就かれて死んだ。

(24) 鯨骨のたが骨を用いて婦人のスカートを大きく拡げることが流行したことを指す。

(25) ウェルギリウス「田園詩」三の六五。

(26) プロペアルティウス、二の一五の六。

ろ、誰でも金さえ出せば買えるものだから、彼女らがどんなことをしても、その美しさはやはり弱くて、訴える力がない。これはちょうど、われわれが徳において、同じ二つの行為のうち、より多くの障害と危険のあるほうを、より美しく、立派なものと考えてのと同じことだ。

神の神聖な教会を、われわれの見るのとおり、あれほどの混乱と嵐に揺すぶられるがままにしておいたのは、この闘争によって、敬虔な魂をよび覚まし、あの長い泰平のためにおちいつていた無為と惰眠から救おうとする神の摂理の現れである。もしもわれわれが、道を踏みはずした多くの人々から受けた損失と、この闘争を契機として、われわれが息を吹きかえし、われわれの信心と力とをよみがえらせたことから得た利益とを比べてみるならば、利益が損失を少しも越えていないとは言えないと思う。

われわれは、われわれの結婚の結び目を、それをほとんどすべての手段を除くことによって、いっそう固くしたと思い込んでいた。けれども、強制の結び目がきつくなっただけ、それだけ意志と愛情の結び目がほだけて、ゆるくなったのだ。これと反対に、ローマにおいて、こんなに長い間、結婚の名譽を尊重させ安泰にしたものは、いつでも好きなときにこれを破棄しようという自由であった。彼らは妻を失うことがあるかも知れないために、いっそう妻を愛した。そして、離婚の完全な自由の中にあって、百年以上も、誰一人としてそれを実行した者がなかった。

許されたことは魅力がない。許されないことは欲望をかき立てる。

このことには、次のある昔の人の意見を結びつけて考えることができよう。すなわち、「刑罰は悪徳を鈍らせるよりもむしろ刺激する。③ 刑罰は善をなそうとする気持——それは理性と規律の仕事であるが——を生まずに、ただ悪を犯しながらつかまるまいとする気持を生むだけだ」というのである。

悪は根絶されたように見えてかえって広く拡がる。

④ 私はこの意見が正しいかどうかは知らない。だが、これまで刑罰によって国の秩序が改善されたためしがないということは経験で知っている。道徳の秩序や規律はこれとは別の何らかの方法によって維持されるものである。

⑤ ギリシアの歴史には、スキュティアの隣のアルギッパイオイ族⁽²⁷⁾のことが書いてある。彼らは人を打ちこらす鞭も棒もたずに暮らしていた。誰も彼らを攻めに行こうと企てる者がなかったばかりでなく、ここに逃げ込むことのできた者は誰でも、彼らの徳と敬虔な生活のおかげで、命が助かった。そして誰一人として、彼らに手出しをしようとする者はなかった。よその土地の人々の間にもめごとがあると、皆は彼らに調停を頼みに来た。

⑥ ある国民にあっては庭や畑の境界が木綿の綱で囲ってあるが、それはわれわれの堀や垣根よりもずっと安全で堅固である。

⑦ 錠前は泥棒を誘う。押入り強盗は戸の開いた家を通りすぎる。おそらく、入りやすいということがわが家をわが国の内乱の暴力から守るのに役に立った最大の理由であろう。守備は攻め気を誘い、警戒は攻撃を呼ぶ。私は兵士たちの行為から、危険を冒し武勲を輝かす材料

(27) オウイディウス「恋愛詩」二の一九の三。

(28) セネカ「寛容について」一の一。

(29) ルティリウス「旅日記」一の一。

(30) 黒海北部の沿岸のサルマティアに住む一種族。

(31) ヘロドトス、四の二三。

(32) ゴマラ「インド通史」三の三〇。

(33) セネカ「書簡」六八。

を——それは常に彼らの口実と弁解に役立ったものだ——全部取り除いて、彼らの意圖をくじいてやった。正義が死んでいる時代には、勇敢な行為はすべて立派な行為となる。私は、彼らにとって、私の家を征服することが卑怯であり、裏切りであるように思わせている。私の家は、扉をたたいた人には誰にも開きされていない。備えといえ、ただ昔風の、儀式張った門番が一人いるだけで、門の出入りを禁ずるよりも、むしろ礼儀正しく、いんぎんに招き入れる役目をしている。私は、私の運勢が私のために与えてくれるもの以外には、番人も守衛もたない。貴族たる者が守備をもっていることを見せびらかすのは、それが完全でない限り、間違ひである。どこか一方が空いていれば、四方が空いているのも同然である。われわれの父たちは要塞を築こうなどとは考えなかった。われわれの邸を攻撃したり、襲撃したりする手段は（私の言うのは大砲や軍隊を用いない攻撃のことであるが）、日に日に防禦の手段を越えて増加しつつある。人間の知恵は一般にこの方向に鋭くなってゆく。侵略は貧乏人も金持も誰でもやれるが、防禦はそうでない。それは金持だけのものだ。私の家は建てられた当時としては堅固であった。私はその堅固さという点ではその後何もつけ加えなかった。堅固さが逆に私にはね返ってくることを恐れたのだ。それに、平和な時代が来れば、防備を取りはずさなければならなくなる。そのときに、元通りに戻せなくなる恐れもある。また、いくら堅固にしたからと言って、それで安心しておれるものでもない。なぜなら、内乱の場合には、自分の召使が自分の恐れる敵側に内通しているかも知れないからだ。また、宗教が口実に使われると、肉親でさえも正義の陰にかくれて、信用できなくなるからだ。まさか国家の財政がわれわれの家の守備

兵を維持してはくれまい。そんなことをしたら国が破産してしまふ。それをするためには、われわれ自身が破産するか、さもなければ、いっそう不都合で不正ではあるが、人民が破産するしかない。人民が破産するよりも私が破産するほうが、私にとっては困らないであらう。それに、あなたが破滅してごらんない。友人たちでさえ、気の毒がるところか、面白がつて、あなたの油断や、不明や、武人としての職務に対する無知や無関心を非難することだろう。たくさん防備された家が破滅し、かえって私の家が持ちこたえたところを見ると、私は、これらの家は防備されていたために破滅したのではないかという気がする。防備は攻撃者に攻撃の欲望と理由を与える。あらゆる防備は戦争の相貌をおびる。もしそれが神様の思召しなら、誰でも私の家に攻めて来るがよい。だが私はいかなる場合にも、わが家に敵を誘うようなことはしない。それは私が戦争から逃れる憩いの場所であり、隠れ家である。私は国家の嵐からこの一隅を免れさせようとしてとめる。ちょうど心の中にもう一つの隅を守るように。わが国の戦争がいくら形を変えようが、どんなに新しい党派に分かれて増えてゆこうが、私自身は動かない。こんなにもたくさんの方々が武装された中にあって、私の身分の者で、自分の家の守りをすっかり天に任せたのは、私の知る限り、フランスでは私だけだ。私は一本の銀の匙も、一枚の証書もちださなかった。私は恐れようとも、生半可に助かるうとも思わない。もし十分な感謝が神の御加護を得ることができるとすれば、その御加護は最後まで私に続くであらう。もしそうでなくとも、私は、私の生存が注目され、特筆されるほど十分に長く生きた。どうしてだって、もうたっぶり三十年にもなるから。

(34) 宗教戦争の始まった一五六〇年、または一五六二年から数えて三十年になるといふ意。